鹿追町　ワーケーション

Hokkaido
Work×Vacation
― 北海道型ワーケーション ―
つながる。感じる。生まれる。

環境を考える 未来を考える 鹿追町

自己紹介

迫田　明巳（はくた　ひろみ）

- 北海道士別市＆池田町出身
- 趣味：マラソン、スキー
- 2006年 鹿追町役場入庁

【主な略歴】

2008.4：北海道企画振興部地域づくり支援局移住交流G（1年間)

2012.4：(一財)自治体国際化協会東京本部

2013.4：(一財)自治体国際化協会シドニー事務所

2015.4：教育委員会社会教育課社会教育係長

2019.7：企画課企画係長

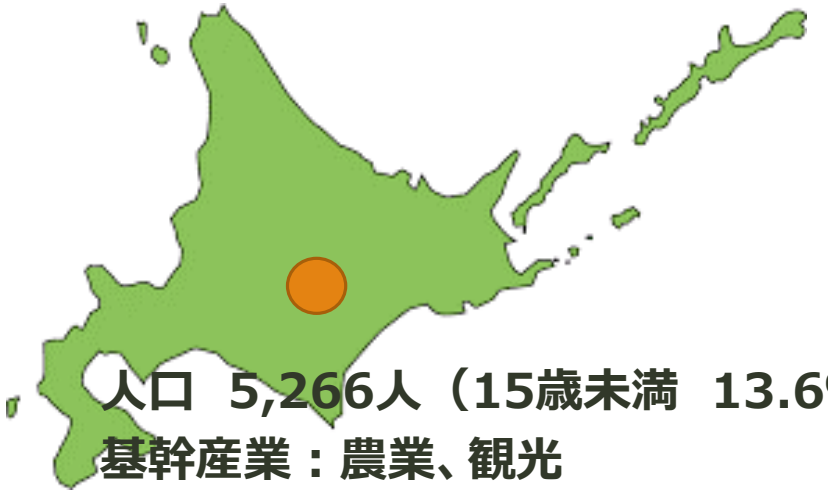
環境を考える 未来を考える 鹿追町

- ゼロカーボンシティ宣言のまち（2021年3月）

  環境省 第1回脱炭素先行地域（2022年4月）
- 日本ジオパーク のまち

  とかち鹿追ジオパーク（2013年）
- 国立公園のまち
- SDGs推進のまち
- 過疎のまち

「鹿追（シカオイ）町」で、訪れた方と環境をテーマに、一緒にマラソンを走るかのように学び、考え、持続可能な未来（ゴール）を目指すショートステイプログラムです。



人口　5,266人（15歳未満　13.6%）

基幹産業：農業、観光

教育、国際交流も特徴的!!

大雪山国立公園・然別湖

- 北海道最高峰の旭岳（2,291m）を主峰
- 北海道を代表する石狩川と十勝川の源流地域を含む「北海道の屋根」といわれる一帯
- 天空の湖と呼ばれる「然別湖」
- 北海道で一番標高の高い湖（標高800m）
- オショロコマの亜種「ミヤベイワナ」の生息地

  （北海道指定文化財・天然記念物）

特定外来生物「ウチダザリガニ」

- 1993年頃に然別湖南西部の湖畔温泉付近で確認
- 2006年度に駆除開始
- 生息域の拡大、生態系への悪影響（ミヤベイワナ、水草など）
- 町や町観光協会、然別湖ネイチャーセンターなどでつくる「生物多様性保全協議会」による駆除
- 企業の協力による駆除

【課　題】

全滅は難しいが生息域の拡大を抑える必要性

駆除経費の確保、人員・協力の確保が課題

- **鹿追型ワーケーション実証事業への導入（2021年）**

参加企業の様子（2022年7月 株式会社HBA）

しかりべつ湖コタン ＆ とかち鹿追ジオパーク

- 冬に完全結氷した然別湖上に現れる幻の村（1982年～）
- イグルー、アイスバー、氷上露天風呂
- 建築資材に雪や氷だけを使用、残存物や廃棄物による湖水汚染の心配もない
- 然別湖付近の風穴地帯には永久凍土が分布

【課　題】

建築作業の人手不足、継承の担い手不足

イベント実施に係る財源の不足

気候変動問題と持続可能な地域運営

- **鹿追型ワーケーション実証事業への導入（2022年）**

モニターツアー（2022年1月 鹿島建設株式会社）

SDGsについて学ぶ

- 広く日本や世界にもつながる環境やエネルギー、SDGsなどに関連した地域課題に直に触れる
- 参加企業の方と地域が課題解決の入り口に一緒に立つ
- その課題解決を通して参加企業のSDGsやCSRの取組が期待されます。
- 認定ファシリテーターと行うSDGsボードゲームを通してSDGsの理解を深め、持続可能な社会・産業・まちづくりを進める鹿追町の現場で地域の取組に触れてみましょう。

（協力）富士通Japan株式会社、東武トップツアーズ株式会社

ワークスペース

- 公共施設（ピュアモルトクラブハウス、平成館）
- 然別湖畔温泉ホテル風水
- トマルカフェ鹿追

ここで会える人たち

- 金森　晶作
- 元南極観測隊員のジオパーク専門員
- 『寒冷地ならではの自然を観察したり、地球規模の視点・地域の視点を交えてお話できたら』

- 水間　幸市
- 然別湖から鹿追町を発信　然別湖畔温泉ホテル風水
- 『自然体系を守りながらも新しいことにチャレンジし、サステナブルな取組を実現できる環境です』

ここで会える人たち

- 迫田　明巳
- 参加者とまちの課題をつなげる　役場職員
- 「課題が解決され『そういえばワーケーションであそこの企業に来てもらったのがきっかけだったよね』となれば素晴らしい」

- 正保　縁
- ワーケーションコンシェルジュ　農泊オーナー
- 『私の好きになった鹿追町で、鹿追らしい・鹿追だからできることをコーディネートします』

鹿追と企業結ぶワーケーション

環境や過疎…町の課題、ビジネスヒントに

【鹿追】町外の企業が町内滞在中に地域の課題に挑戦する、鹿追独自のワーケーション「シカソン」が注目を集めている。町は東京と札幌のセミナーに職員を講師役で参加させるなど、ワーケーションの新たな魅力として道内外に発信し、「仕事と観光の両立を図る従来型ではなく、地域と企業を結ぶモデルにしたい」と意気込む。（伊藤圭三）

町は、観光庁のモデル指定を受け、2021年度に大手ゼネコンの鹿島（東京）と独自のワーケーションスタイルを模索。3泊4日の日程で、然別湖のホテルに仕事場を設け、環境への影響が懸念される特定外来生物ウチダザリガニの駆除や、冬のイベント「しかりべつ湖コタン」のイグルー作りを行う旅を提案した。

本年度は、札幌のIT企業が3日間滞在し、町が進めるゼロカーボンシティ宣言やジオパーク、国連の持続可能な開発目標（SDGs）を生かしたまちづくりの様子を視察。日程の大半を町や民間企業などとの交流や学習会に費やし「環境や地域経済、過疎などの問題に触れ、ビジネスのヒントを得た」と好評だった。

町はこうした課題解決型のワーケーションを、アイデアとマラソンを掛け合わせた造語「アイデアソン」をヒントに「シカソン」と命名。「マラソンを走るように学び、考えたい」と狙いを説明する。

町の取り組みに興味を示した日本テレワーク協会は、4日に東京で開いた「デジタル田園都市」がテーマのセミナーへの出席を要請。町や長野県松本市など全国14の自治体や企業が集まる中、町企画課の担当者は、企業との関わりやワーケーションの将来性、シカソンの魅力などを紹介した。

東京、札幌のセミナーで報告

さらに、10日には道が札幌で開催する「北海道型ワーケーションセミナー」で事例報告する。

同課は「町のバイオガス発電や燃料電池車、環境問題への関心は高い。今後は、地域の課題を考えながら仕事に生かすスタイルが主流になる」と期待する。

地域貢献型ワーケーションの一環でザリガニ駆除に取り組む参加者たち＝2021年10月、鹿追町

「参加型」新モデル構築へ

鹿追町が実証実験

施設見学後、町内のホテルで地域の課題を話し合うワーケーション参加者

【鹿追】町は本年度、民間企業を軸にワーケーションの受け入れ態勢を整える実証実験に取り組む。地域参加型の新たなモデルを考案し、新規企業の獲得を目指す。第1弾として札幌のIT企業が2泊3日の日程で町内を訪れ、持続可能なまちづくりを学んだ。

実験は道観光振興機構の事業として実施。町内で旅行ガイドを行う社団法人「Ｅｎ」に委託し、町全体で取り組むゼロカーボンシティ宣言、ジオパーク、国連の持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）推進のまちづくりなどをテーマにワーケーションで訪れた企業と町、町関係者、民間事業者が視察や交流を行う。

Ｅｎは受け入れやテーマ設定、顧客開拓などを担当。観光地を巡る従来の「旅行型」ではなく、環境や地域経済、過疎といった地域が抱える問題を話し合い解決する「参加型」のビジネスモデルの構築を目指す。

初参加した札幌のＩＴ企業は社員7人が7月11～13日にＥｎが企画した家畜ふん尿由来のバイオガス発電や然別湖に生息する特定外来種ウチダザリガニの駆除を見学。町関係者との学習会では水素で走る燃料電池車（ＦＣＶ）の活用やＳＤＧｓと行政との関わりなどに関心を示した。

道内のワーケーションに詳しい北海道二十一世紀総合研究所（札幌）の佐藤公一次長は「旅行型のワーケーションはどこも同じで長続きしない。地域の課題解決に取り組む参加型が今後の主流になるのでは」と話している。（伊藤圭三）